

# CAPS Newsletter

The Center for Asian and Pacific Studies, Seikei University

No.128 October, 2015

## 目次

### 〈CAPS 主催企画の報告〉

花崎皋平氏講演会・ワークショップ

CAPS 主任研究員 田浪 亜央江 ……………1

ワークショップ「浪曲からパンソリへ、パンソリから浪曲へ」

CAPS 特別研究員 村上 陽子 ……………3

ワークショップ「ソ連対日参戦 70 年—シベリア抑留を考える—」

CAPS 特別研究員 上原 こずえ ……………4

### 〈センター叢書紹介〉

山田昌弘・小林盾編『ライフスタイルとライフコース：

データで読む現代社会』（新曜社、2015 年）

文学部教授 小林 盾 ……………6

上田泰編著『従業員と顧客の自発的貢献行動』

（多賀出版、2015 年）

経済学部教授 上田 泰 ……………7

### 〈書評〉

浜崎洋介著『福田恆存 思想のくかたち』イロニー・

演技・言葉』（新曜社、2011 年）

文学部教授 遠藤 不比人 ……………9

### 〈CAPS 研究員 研究内容紹介〉

矢土錦山の書簡と『錦山遺稿』

成蹊大学非常勤講師／元 CAPS 客員研究員

日野 俊彦 …………… 10

〈アジア太平洋研究センター (CAPS) 活動報告〉 …… 12

## CAPS 主催企画の報告

今年度、前期に予定されていた企画が無事終了しました。7月10日、11日は、北海道から花崎皋平氏をお招きして講演会とワークショップを行い、12日はワークショップ「浪曲からパンソリへ、パンソリから浪曲へ」が開かれるという、3日間の連続企画となりました。8月8日に実施されたワークショップ「ソ連対日参戦 70 年—シベリア抑留を考える—」とあわせ、報告文を掲載いたします。

### 花崎皋平氏講演会「共生とアイデンティティの思想」／

ワークショップ「共生をめぐって—活動と反省—」

CAPS 主任研究員 田浪 亜央江

#### ■花崎皋平氏講演会 共生とアイデンティティの思想

7月10日、しばらく続いていた雨はこの日ぴたっと止み、よく晴れた明るいキャンパスで、哲



学者・花崎皋平氏の講演会「共生とアイデンティティの思想」が開かれた。大学教員を自主退官後、あえて在野の立場から多数の著述をものにしてこられた花崎氏は、冒頭でアイデンティティをもつこととは自らの営みとして考え方・生き方の座標軸をかたちづくることではないか、と提起され、ご自身が深く感銘を受け、また影響を受けた「民衆思想家」の足取りと思想を紹介するかたちで講演を進められた。

その一人は足尾鉍毒事件で知られる田中正造である。「聖人」「義人」などと呼ばれる田中正造であるが、意外にも彼についての研究者は現在決して多くないという。その細々とした研究のなかでは近年、地域の農民たちが田中正造とともにどのように生き、どのように闘ったのか、という視点の広がりが見られているとのことで、この点を花

崎氏も重要だと考えているという。また、足尾鉍毒事件で被害を受けた谷中村が廃村にさせられ、運動としては敗北してしまっただけで、重要なのはむしろその後なのだと言われ、それにははっとさせられた。また筆者のまったく知らなかった田中の思想的な広がり、特に人間が自然の一部であるという発想が抽象的な理念として唱えられるのではなく、谷中村の農民がその土地に生えている大木のようなものとして存在し、農民が土地を所有しているのではなくむしろ農民のほうがその土地に属し所有されているのだ、といった考え方は、たいへん興味深いものだった。花崎氏は御自身が付き合ってきたアイヌのなかに同様の考えがあるということと言われたが、筆者にとっては同様に、パレスチナの農民の思想や生き方を思いおこさせる話であった。

もう一人、花崎氏が紹介されたのは、『苦海浄土』で知られる石牟礼道子である。石牟礼は同書だけでなく、歴史に題材をとった小説やエッセーを多数執筆しているが、花崎氏は特に、無名の「目に一丁字もなき者たち」の生きざまに思いを寄せた『西南役伝説』と、「天草・島原の乱で原城で立てこもった名もなき人々」の姿を描いた『春の城』（のち『アニマの鳥』と改題）について紹介された。そして宗教が人々を救済するのではなく、無名の人々はその生き方と死に方なかで和解と融和を果たすことでむしろ宗教を救っているのではないのか、という石牟礼氏の思想のひとつの到達点について語られた。

田中正造と石牟礼道子。この二人の思想のあり方は時代や場所を越えて響き合い、自然や人間、人生というものに対する見方を広げる喚起力を持っている。冒頭で花崎氏は内村鑑三を引用しながら、現在の日本が「亡ぶべき」ものになりつつあることを示唆されたが、こうした豊穡な思想が生まれた風土の記憶をどのようなかたちで受け継ぐことが可能なのかということにこそ、思想の力が問われているように感じた。

#### ■ワークショップ「共生をめぐる一活動と反省」

花崎皋平氏を北海道からお招きしての二日目の企画はワークショップのかたちで開催され、花崎氏に加え、同氏がご自分の大切な友人とされている弓野由美子氏と孫和代氏に参加して頂き、三者で心ゆくまでゆっくり語りあって頂いた。司会をされたのは、一橋大学の鶴飼哲教授である。



弓野由美子氏（右）と孫和代氏（左）

弓野由美子氏は、アイヌのユカラ（口承物語詩）をはじめとするアイヌ文化の紹介者である。はじめに写真を写しながら、ご自身の家族や育ってきた北海道の姉妹での生活や和人ととの関係などをお話されたあと、カムイユカラを謳われた。これはアイヌの神が、動物や植物のかたちになって出てきて語りをしているという形式をもつ詩であるという。弓野氏は朗読されるユカラの選択にたいへん迷われたと聞いているが、今回はアワの神の語りを選び、食べ物の恵みを大切にしながら生きていたアイヌの、世界や自然に対する見方の一端まで垣間見せて下さった。ユカラについては知識として知ってはいても、直接謳われる朗読にじっくりと耳を傾けたのは筆者にとって初めてのことであり、鶴飼氏の言われたとおり、次第に「身体が温かく」なるような経験であった。

休憩を挟み、長年ハンセン病療養所の訪問を行ない聞き取りやケアを行なって来られた孫和代氏が、ご自身のそれまでの生活、そして療養所で見聞きして来られたことがらを話された。在日韓国朝鮮人の療養者に対するすさまじい差別や、女性療養者が受けた強制堕胎の話に参加者は息をのみ、会場は水を打ったように静かになった。孫さんは「私自身は何もしておらず、ただ証言を聴いてきただけ」という意味のことを何度か言われたが、全国の療養所を回ってこうした証言を受けとってきた孫さんの足取りの力強さ、確かさが言外にびしびしと伝わり、会場の空気を揺らしているように感じた。

花崎氏はまず、戦後70年についてネガティブなことばかりが言われているが、その70年のなかで、弓野さんや孫さんのような人たちが育って



きたのだ、そしてこの二人のような友人をもっているということが、自分にとってのアイデンティ

ティだと言えるのだ、と言われた。前日の講演の内容は主に、書物を通じた思想的な営みを基にしたものだったが、その思想を生きたものになっているのは、花崎氏が生活実践や地域の運動のなかで作り出してきた、こうした豊かな関係のありようである。そのことがまざまざと思い知らされた。その後の三者の対談はひじょうになごやかで、お互いに触発しながら話が引き出されてゆき、見ていただけでうらやましくなるような友情のありようが伝わってくるものだった。二日間の企画を通して参加することで、花崎氏の偉大さだけでなく、そのポジションの独特さ、ユニークさがじわじわと伝わり、それは不思議な酩酊感と高揚感となつて、長らく身体のなかに残り続けたのである。

### ワークショップ「浪曲からパンソリへ、パンソリから浪曲へ」

CAPS 特別研究員 村上 陽子

浪曲とパンソリ。異なるかたちの語りの文化が手に手を携えてやってくる。自らを愚か者と名乗る、千年さすらいかもめ組とはいったいいかなる人たちか。浪曲師・玉川奈々福、曲師・澤村豊子、パンソリ ソリクン・安聖民、鼓手・趙倫子、そして道案内の姜信子。彼女たちが一堂に会し、祈りによって場が開かれたとき、6号館のロビーは常とは異なる空間となり、声と音を響かせる舞台となって私たちの前に広がっていた。

晴天の7月、大窓の向こうの鮮やかな緑を背景に玉川奈々福の浪曲が始まる。澤村豊子の三味線が鳴り、奈々福が語り始めたのは稀代の金魚師と彼が丹精込めて育てた空色の金魚の恋の物語。空色の金魚は自分を育て上げた金魚師と意思を伝わらせていたが、珍奇な色と美しさゆえ、中東の金持ちに買われていく。しかし金魚師恋しさにチグリス川に飛び込んだ空色金魚、意地と執念で地球をめぐり、見事に金魚師の生簀の中に戻っていく。グローバルでダイナミック、笑いに満ちた金魚の恋と旅だった。

続いてパンソリが始まる前に、観客は椅子と体を90度回転させ、白い壁のほうを向くよう促された。色鮮やかなチマチョゴリを着けた安聖民と趙倫子によるパンソリの曲目は「沈情歌」。背後の白壁に日本語の字幕が映し出され、観客は韓国語の語りに耳を傾けた。孝行な娘が盲目の父の目を開かせるため神に身を捧げるが、神のはからい



で生き返り、皇后の身分に登りつめる。皇后になった娘は父を探すため、国中から盲人を集めて宴を開く。都にたどりつくまでの父とその再婚相手の珍道中は滑稽で、いよいよ娘と対面し、父の目が開くクライマックスはまさに圧巻。浪曲、パンソリ、いずれも終了後の拍手が鳴り止まないほどの盛り上がりだった。

さて、この後にいかなる語りが続くのか。観客の期待は高まるばかり。しかし舞台はそれまでとは打って変わって、静けさを取り戻していく。午後の日も次第に傾き始め、ロビーにそそぐ日差しもだいぶやわらいだものになっていた。白い壁の前に低い椅子が据えられ、そこに白いチマチョゴリを着た安聖民がうつむき加減に腰掛ける。案内人の姜信子はその傍らに。そしてケンカドリと呼



ばれた、済州島四・三事件を生き延びた一人の少年の体験が、姜信子によって導かれ、安聖民の咽喉を通して、日本語で私たち観客の元に届けられることとなったのである。ケンカドリは語る。少年時代の貧しい日々を。四・三事件で受け

た拷問、母の悲鳴、兄の死を。父との暮らしを。言葉を獲得することの痛みと希望を。安聖民の身体と声を借りて。観客の後ろに位置した演者たちは三味線をかきならし、鼓の音を響かせ、ケンカドリの語りとともに空気を震わせた。

ケンカドリの物語の筋をなぞることでは、とてもあのパフォーマンスの魅力を伝えることができないと思う。私が一人の観客として感じたのは、ケンカドリの語りが日本語を語る私たちに届いてしまうことの痛みだ。ケンカドリは植民地時代に育ち、韓国語を自らの言葉として持つことができなかった。日本語でしか語れない彼の言葉が、日本語を解する者に届いてしまう。伏せられた安聖民のまなざしは、観客に直面することなく傾けられたその顔の角度は、ケンカドリの語りが幾重にも屈折し、すれちがっていくものであることを示していたように思われる。しかしそれでは植民地体験を、済州島四・三事件を、いかなる言語で、

誰に対して語ることが「正しい」のかと問われれば、たちまち答えに詰まってしまう。

そう考えたときに、非常に重要なものに思えたのは、道案内の姜信子もまた流浪の存在としてケンカドリとすれちがった存在であることだ。実は、ケンカドリ（を演じる安聖民）のまなざしは、観客ではなく傍らの姜信子に向けられていた。流浪する存在同士のためさかの対話がこのような聞き取りを可能にしたのだとすれば、話を聞こうとする者もまた、複数の言語、複数の場所、そして長い時間を流浪する存在でなければならないのかもしれない。流浪しながら語り - 聞く愚か者に、明確な宛先を持たないケンカドリの語りか、ふっと届いてしまったのかもしれない。その瞬間が、いま・ここで分かち合われている。そんなふうに感じられたのである。

休憩を挟んで開催されたワークショップでは、目の前で演じられた圧倒的な語りの芸にまだ追いつかない言葉を、観客と演者がともに探りあてようとしているようだった。特に幾度も話題に上ったのは、済州島四・三事件を誰が語ることができるのか、ということである。当事者にまず語る資格があるとするならば、済州島と難しい関係にあった韓国の別の地域の出身者は語れないのか。日本人には韓国の歴史体験は語れないのか。当事者とは名乗れない者が体験を語ろうとするときにブレーキになってしまう感覚はいったい何なのか。そのような、答えの出ない問いが積み重ねられていったが、けして息苦しくはない思考の空間が生まれていた。語れないと思っけていても、演じてみると体が動く、楽器が鳴り響く、そしてともに震えてしまう。そのような思いも参加者の言葉の端々にあふれていたのだ。

そしていつまでも冷めやらぬ興奮を残して、愚か者たちは帰り支度をはじめ。また出会うための別れに向けた、軽やかな出発をするために。

## ワークショップ「ソ連対日参戦 70 年—シベリア抑留を考える—」

CAPS 特別研究員 上原 こずえ

アジア太平洋研究センターでは、8月8日土曜日にワークショップ「ソ連対日参戦 70 年—シベリア抑留を考える—」を開催した。夏休みに入ってもない土曜日の開催であったが、会場には入りきらないほど多くの参加者があった。

今回、ワークショップに参加するにあたり思い出していたエピソードがあった。私はこの10年間、戦後の沖縄で住民運動を組織した方々に取材をしてきたが、そのなかで出会った1930年代生まれの男性は、沖縄を離れ大阪で養子として暮ら



していた時期があった。1946年頃、養父母の長男がシベリア抑留から帰還したが、気むずかしい性格で地域社会になじめず、ほとんど仕事をせずにいた彼にはとても厳しくしつけられたという。

「シベリア抑留」という出来事は、彼を含む抑留者にどのような経験を強いたのだろうか。抑留者や家族は、戦後の日本において、そして第二次世界大戦後の世界において、どのような処遇を受けてきたのだろうか。1945年8月8日（モスクワ時間／日本時間は9日）、連合国のヤルタ協定に基づきソビエト連邦軍が旧満州（中国東北部）に押し寄せた。前後に広島・長崎に原爆も投下されていた。日本はポツダム宣言を受諾して降伏、だが旧満州で捕虜となった関東軍将兵ら約60万人はソ連領内に連行され、以後何年間も強制労働に従事させられた——このように説明される〈シベリア抑留〉を国際比較から、そして抑留者の個人史から捉え直そうというのが本ワークショップの試みであった。

第1部「ソ連の捕虜となったドイツ人と日本人」では、麻田雅文氏（岩手大学）の進行の下、アンドレアス・ヒルガー氏（マールブルク大学）と所員の富田武氏（成蹊大学）より話があったが、そこで強調されていたことは、捕虜・抑留者の国籍や抑留の時期、収容所の稼働状況や捕虜政策の確立の度合いによって抑留者らの経験が大きく異なっていたということだ。さらに戦後の処遇についても、第二次世界大戦後の外交関係や国内情勢、経済状況によって補償の有無や補償額などの面で違いが生まれていた。2010年に成立した「戦後強制抑留者特別措置法」に基づく抑留者への補償では、日本軍人・軍属であった朝鮮人、民間人は対象とはならなかった。同様の問題はドイツ兵に対する処遇においても見られ、ドイツ兵のなかでも

東ドイツ帰還者は西ドイツ帰還者より補償額が少なく、が支給されたり、旧ユーゴ、チェコなどを出身とする者はさらに減額されたりした。

第2部では国家間の戦争に加担させられ、戦後もその代償を払うことを強いられ続けた兵士を父に持つ山本顕一氏（立教大学）と渡辺祥子氏が、〈異国で死んだ父〉をテーマに、生き別れ、再会すらできなかった父の記憶を、残された遺書や探し歩いた経験をもとに語った。山本氏は、第二次世界大戦後も「戦犯」としての刑を受けて抑留され続け、引き揚げできないままハバロフスクで逝去した父・山本幡男氏について語った。父の経験したシベリア抑留は、作家の故・辺見じゅん氏がその生を書き残してくれたように（『収容所（ラーゲリ）から来た遺書』文春文庫、1992年）、顔を背けなくなるような、知れば知るほどつらいエピソードであった。だが、抑留生活のすべてを記録したノート、父は足にくくりつけ必死の思いで隠し持っていた。シベリアでは紙に書いたものを所持することが許されなかったのだ。このノートや父の遺書を手にし、父が句会に参加し、俳句を詠み、小冊子に挿絵を描いていたということを知った。父にこんな面があったのか、と驚きを隠せなかった。

渡辺氏はノリリスクで逝去した父・渡辺良穂氏について語った。樺太庁に務めていた父と別れたのはサハリンであったが、引き揚げ後、帰ってくるはずの父からは連絡さえなかった。父の消息を訪ねる努力を続けた結果、引揚者の情報から父がロシア連邦クラスノヤルスク地方の都市・ノリリスクで逝去したことを知り、ソ連崩壊前の1990年、ついに母とノリリスクに足を踏み入れた。その地に慰霊碑を建立したいという母の遺志を引き継いだ渡辺氏は、現地の人たちの力を借りながら、今それを実現させている。慰霊碑には、人は生ま

れた以上生きる権利があり、殺してもいけないし殺させてもいけない、何より命が大事である、とのメッセージを込めたという。

国家間の戦争により、戦闘に加わることを余儀なくされ、捕虜となり、〈異国の地〉で労働を強

いられた人々のかけがえのない生をどのように聞き取り、伝えていくのか。一国史にとどまらずに、国際比較や個人史を通して〈戦争〉を問い続けていく意義が、本ワークショップでは共有されたように思う。

## センター叢書紹介

アジア太平洋研究センター太平洋研究センター(CAPS)では、3年間の共同研究プロジェクトの成果を、「成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書」として刊行しております。このたび2冊の叢書が刊行の運びとなりましたので、プロジェクトを実施された小林盾先生、上田泰先生にそれぞれ紹介文をご寄稿頂きました。

山田昌弘・小林盾編『ライフスタイルとライフコース：データで読む現代社会』

(新曜社、2015年)

文学部教授 小林盾

### 1. 本書の概要

この度、成蹊大学アジア太平洋研究センター叢書の1冊として本書が刊行された。共同プロジェクト「アジア太平洋地域における社会的不平等の調査研究」(2008～10年度、研究代表小林盾)の成果である。プロジェクトで「2009年社会階層とライフスタイルについての西東京市民調査」というアンケート調査を実施したので、そのデータ分析を中心に据えた。アンケート調査の調査票が巻末に掲載されている。本学からは、代表者の小林盾にくわえ、飯田高(当時法学部)、今田絵里香(文学部)、渡邊大輔(文学部)が執筆している。以下、本書「はじめに」から全体像が分かるよう抜粋しよう。

### 2. 本書の狙い

戦後から1980年頃までは、「一億総中流化」と言われたように、一定のライフコースをとることが「標準的」とされ、人々がそのようなライフスタイルをとるように、政策やマスメディアなどさまざまな方法で誘導されていったのである。就職は新卒時が一番有利であり、女性差別があり、年金・税制など、標準的ライフコースをとると最も有利なように構成されている。戦後普及したテレビでは、幸せなマイホームの姿が放送された。

しかし、1990年代から、日本社会を変化の波が襲った。グローバル化、ニューエコノミーなどといったものが、人々の生活に変化を及ぼした。そして、近代社会の構造転換に伴って生じた生活

のリスク化は、格差を伴ったものであるという視点が重要である。若者の中にも、正社員として就職したり、安定した正社員と結婚したりして「従来の標準的ライフコース」を今まで通り辿り、妻の手料理や家族レジャーを楽しむ人もまだまだ多い。一方そこからこぼれて、低収入で不安定なフリーターになる人もいれば、離別ひとり親家庭も増えているかもしれない。では、その現実はどのようなものなのだろうか。

### 3. 本書の構成

そこで、本書では「現代日本のライフスタイルとライフコースは多様になったがゆえに、もしかしたら格差も拡大したのではないか」という視点から分析をおこなった。全体として、多くの人が経験する(と期待されている)人生の出来事を検討している。研究トピックでは、関連研究のフロンティアを紹介している。

ただし、社会的格差を分析すると、ともすれば「個人の努力ではどうしようもない格差が存在する」ことの再確認になりかねない。そこで本書では、格差の存在を実証したうえで、それでも「どのような未来形があるのか」「どうすれば格差を乗り越えられるのか」を提示するよう心がけた。本書によって「こんな選択肢があったんだ」と人生の幅がひろがることを願っている。

#### I ライフスタイル編

##### 1章 食事：階層格差は海藻格差か



- 2章 人間関係：都市と農村にどのような格差があるのか
- 3章 美容：美容整形・美容医療に格差はあるのか
- 4章 音楽：「みんな」が好きな曲はあるのか
- 5章 幸福：下流でも幸せになれるのか
- II ライフコース編
- 6章 恋愛と結婚：国際結婚に見る未婚化社会のジレンマとは
- 7章 家族：家族形成にはどのような格差があるのか
- 8章 教育：子どもを私立に通わせる家庭のラ

イフスタイルとは

- 9章 仕事：なぜ非正規雇用が増えたのか
- 10章 退職後：プレ団塊世代にとってサークル活動のジレンマとは

研究トピック（コラム）

- 1 温泉：非日常の空間演出とは
- 2 テレビ：社会階層・ライフコースは視聴に影響を与えるか
- 3 雑誌：社会階層との見えないつながりとは
- 4 婚活：なぜ結婚難は続くのか
- 5 トラブル：紛争に格差は生じているか
- 6 法律知識：法への道は平等に開かれているか
- 7 塾：豊かな社会における格差問題とは
- 8 孤立感：なぜ不安を抱くのか

#### 4. 本書の特色

すべての章と研究トピックで、なんらかの経験的なデータをエビデンス（証拠）として使用しているのが、本書の大きな特色といえる。官庁統計、自分たちで実施したアンケート調査、インタビュー調査、歴史史料など、できるだけ多様なエビデンスを用意した。

さらに、各章は共通したステップで議論をすすめている。「第1節 問題」「第2節 データと方法（インタビュー調査では対象と方法）」「第3節 分析結果」「第4節 まとめ」とした。章のサブタイトルは、「食事：階層格差は海藻格差か」のように各章で解くべき問題となっている。謎解きのように読み進めてもよいだろう。大学生の読者にとっては、卒業論文のアイディアの源となるかもしれない。

上田泰編著『従業員と顧客の自発的貢献行動』（多賀出版、2015年）

経済学部教授 上田 泰

組織研究の古典的名著の1冊とされるカッツとカーンの著作(Katz, D. & Kahn, R. L., The Social Psychology of Organizations, 1966)によれば、組織の機能と有効性を確保する上で組織メンバーに求められる行動には3つの種類がある。そのうちの2つは、組織に参加する行動と、職務として割り当てられた公式的な役割を達成する行動である。この2つの行動の必要性は明確であるのに対して、彼らが3つめの行動として示した「革新的および自発的行動」の重要性は一般的には気が付

きにくい。革新的および自発的行動とは「役割規定で定められていないものの、組織目標の達成を促進させる行動」であり、具体的なものとして、(a) 同僚との協力的行動、(b) 組織や部門を守る行動、(c) 組織改善のための創造的提案、(d) 組織における自分の責任を高める自己訓練、(e) 組織にとって望ましい外部の雰囲気を作り上げる行動があげられている。このような行動は、組織が環境変化に効果的に対応するためには不可欠であるが、あらかじめ規定することもできない行動であるし、

さらに困ったことに、その多くは組織の中で習慣的に行われており、目立つものでも、また注目を浴びるものでもない。そして、このような特徴ゆえに、この種の行動は重要でありながらも、組織研究においては長年にわたって無視されてきたものであった。1980年代になって、ようやくオーガン(D. Organ)を中心としたインディアナ大学の研究者たちによって、この種の自発的な貢献行動は「組織市民行動」と名付けられ、今日では、その後多くの研究者の関心を集めるに至っている。組織市民行動のような自発的な貢献行動の重要性は、どの組織にとっても環境変化に応じた組織メンバーの行動をすべて役割行動として事前に規定することが現実的ではないことから明らかである。このような変化が生じた際には、組織メンバーの臨機応変な自発的行動に依存しなければ組織は存続できないのである。

これまでの組織市民行動の議論の問題の1つは、その種の行動を、従業員という組織メンバーだけが行うと暗黙のうちに仮定していたところにある。しかし、組織が多様なステークホルダーの支援のもとで存続することを前提にすれば、従業員だけが自発的貢献をするのではなく、顧客や株主といった多様なメンバーが従業員と同じように自発的な貢献行動を通じて組織を支援しているというのが真の姿であると考えられる。そこで、本書は、従来の組織市民行動の研究では焦点が当てられてきたものよりも広範な観点から従業員や顧客の自発的貢献行動について研究を行うことを意図している。これまで組織市民行動に注目してきたのは組織行動の研究者であるが、本書の執筆に参加したのは、編著者を除いて組織行動以外の専門家である。これは、このような専門家が組織に対する自発的貢献行動に注目することによって、従来にない新しい視点を得られるとの期待による。

本書は全10章構成となっている。第1章は、

組織メンバーや顧客の自発的行動への注目のきっかけとなった初期の研究を中心にその種の行動の必要性と、そこに研究者の注目が集まるに至った経緯が説明される。まず、第2章から第5章までは、従来からの組織市民行動の研究を振り返り、その系譜を確認するとともに今日的な議論を検討することを狙いとしている。まず、第2章は、組織市民行動の概念とその測定次元について概観するとともにその問題点について検討する。次に第3章では、組織市民行動に影響する要因に関する実証研究を、その要因を3つのレベル(個人、集団、組織)に分けて、それぞれ検討する。第4章

は、特に日本独自の組織市民行動について、その次元を中心に考察する。また、第5章は、組織市民行動の枠組みではあるが、従来は焦点を当てられにくかった生産者の行動に焦点を当てた議論が展開される。

第6章から第8章では、特に顧客の自発的行動に焦点を当てている。第6章では、顧客の口コミ効果が議論され、第7章では顧客のブランド意識が自発行動を生む事例が展開される。さらに、第8章は、大学での学生の自発的貢献として、ゼミでの学生の行動に焦点を当てている。第9章で

は、個別のステークホルダーの貢献行動を超えて、企業倫理の観点から組織市民行動を考え直した議論が展開され、今後の議論の発展性が志向される。また、最終の第10章では、全体をまとめて、今後の研究の方向性が検討される。

著者としては、本書がきっかけとなり、組織の貢献行動に対する議論が従来よりも広い観点から、また様々な領域の研究者から行われることを期待している。最後に、アジア太平洋研究センターの共同研究としてスタートしたこの研究がこのような形で書籍として出版できたことは、同センターの前所長中神康博先生、現所長の李静和先生をはじめとして、スタッフの方々のおかげである。この場を借りて心より御礼を申し上げたい。





## 書評

浜崎洋介著『福田恆存 思想の<かたち> イロニー・演技・言葉』（新曜社、2011年）

文学部教授 遠藤 不比人

保守の劣化というよりは幼児化とも言うべき現状というよりは窮状に生きざるを得ない今日、福田恆存の「保守」を「思想の<かたち>」として読み抜く本書をどう遇するべきか、つまりこの卓越した福田論の内容に賛同する以前にその議論を今日的な文脈にどう位置付けるべきかという問題がまずは浮上する。ただここで急いで付言すれば、保守を僭称する現下の政治家の言動を「保守」と

呼び、それに抵抗する自身の態度を「革新」と呼ぶがごとき紋切り型を無批判にいま踏襲するとすれば、かかる知的怠惰にかつて仮借なき批判を加えたのが福田その人であった。このことを想起するとき、この孤高の批評家の今日的意義の輪郭が見えてくるかもしれぬ。浜崎氏は終章において福田を読解するメタ言語として現代思想を援用するどころか、福田の言語の内部に現代思想の可能性の数々が先駆的に批評の<かたち>として脈動していることに感嘆する。その点から言うなら、福田恆存とは戦後日本の支配的言説

に右左を問わず反復された一連の抽象的形而上学を独自の思想において執拗に脱構築した「保守」思想家ということになるのか。

福田は敗戦直後に華麗に登場した新進批評家であるという紋切り型がこれも無批判に繰り返されるが、本書は戦後俄に注目を集めた彼の批評の根幹に戦前における日本浪漫派との近接と離脱を読む。具体的には保田與重郎の鍵語であるイロニーを自家薬籠中にしながら神と共同体を喪失した近代的自我への懐疑を自己言及的に徹底し、その否定の身振りの果てに自我なる「空虚」において文学が不可能として可能となる作家的「誠実＝地獄」を自身の批評言語として実践した。その脈絡で芥川、太宰論が執筆され、私小説を戦前の封建的遺

物と断じる戦後の「進歩的」文学論の虚妄を突く。文学（近代）的自我に関する日本浪漫派の否定性の地獄を通過した福田にとって戦後の「主体性論争」あるいは「政治と文学」なぞという問題設定は右左を問わず知的弛緩以外の何ものでもなかった。

しかしこの無限後退する自我をめぐるイロニーはD・H・ロレンスの思想を通過することで転向ならぬ「転回」を遂げる。個と集団の乖離という近代の宿命の内在的超越を絶望的に志向するロレンスと相即しながら福田は、語り得ぬ自己を語るというイロニーの不可能性が他者を前提する以上、そこには自己＝仮面が間主観的あるいは演劇的空間において行為遂行的に立ち上がる、その可能性に賭ける。その態度が福田の戦後の批評の根源に「個」と「全体」という問題系を招来した。この福田的「全体 wholeness」は戦後進歩主義者の形而上学たる「全体性 totality」へ鋭利に介入する。前者はそれに所属することを



宿命付けられた「個＝部分」からは全体を明察することが叶わぬ「全体」であって、福田においてそれは「自然」あるいは「伝統」と等価である。つまり一個の生活者が選択以前に生きる自然＝必然としての伝統がそれであり、それがなければ「私が私でなくなる」という次元において個と全体は換喩的に交互に包摂し合う。つまり福田の全体＝伝統とは人の日常の生においてあくまで行為遂行的に浮き上がってくる或る何かであり、積極的に語ることができない領野にそれは存する。それに比し戦後進歩派の「全体」とは「民主主義」という一語で歴史と文化のすべてを睥睨する生活とは遊離した抽象であって、その意味で戦後保守ないし右翼の「国体」あるいは「天皇」もその抽象（積極）

性において同断である。それを直接語ることはできないがそれは確かにここにありそれがなければ私が私でなくなる或るもの。この一種保田的同語反復に福田のイロニーの戦後的転回があり、例えばそれは彼の「国語改革」批判においても遺憾なく発揮される。

しかし福田を読むとは？ 思えば保守を名乗る政権が「日本」をいかなる懐疑もなくあまりにも積極的な「理念」として語り、かつての安保論争にあって福田が丸山真男から脱構築的に流用した「実定法万能主義」でさえが蹂躪される今日におよび（さらにいえば米国は庇護＝防衛から搾取＝篡奪に戦略を転じている）国会前でデモを取行しつつ「民主主義とは何か？」と修辭疑問を発

し「民主主義とはこれだ！」と連呼（同語反復）する大学生の言葉に生きているのは（彼らにとってデモは生活の一部である）その語の最善の意味で福田的「保守」ではないのか。彼らの連呼は行為遂行的に「民主主義」という不可視の全体の「いまここ性」を立ち上げていないか。福田は自らの保守主義を生活者として享受すべく政治を「賤業」と見下すことができたが、現在の民主主義的な保守主義者にはそのような高踏的贅沢は許されていない。しかし福田恆存の保守主義的脱構築は現政権を「保守」と呼ぶことを決して許しはしまいし、今日のデモのパラダイムがかつての安保闘争のそれとは完全に変質していることをなによりも明晰に説明する。

## CAPS 研究員 研究内容紹介

### 矢土錦山の書簡と『錦山遺稿』

成蹊大学非常勤講師・元 CAPS 客員研究員 日野 俊彦

近年、明治から大正にかけて活躍した漢詩人たちの伝記研究が続いている。ここでは、明治・大正に活躍した書家・漢詩人の矢土錦山が、巖谷季雄宛に送った書簡（架蔵）を、錦山の漢詩文集『錦山遺稿』と併せて紹介したい。

まず、手紙の翻刻を挙げる。但し、文字配り等変えた箇所がある。

尊考一六先生遺稿御上梓二付、跋文相撰可申旨拝承。尊考先生ハ於小生有師父之恩。謹て起草、不日呈覽可仕候。乍序相伺候一事ハ、往年尊考ト文章軌範ヲ対読之節、川田甕江翁ノ評點有之候モノヲ翁ヨリ借受、尊考ト共ニ各自ノ蔵書ヘ写取候処、小生ハ半分計ニテ相廢候へ共、尊考ハ全部御写取ニ相成候筈ニ有之。何卒右御手写本御取調、暫時借用相願度、小生蔵書ヘ写足し候ハ、真様返上ニ可仕候。草々拝復。

日下部辨二郎様 巖谷季雄様 矢土勝之 四月二十五日

矢土錦山（1849～1920）、名は勝之、号は錦山など。現在の三重県松阪市に生まれた。伊勢津藩の藩儒土井贅牙に学んだ後、巖谷一六（1834～1905）の推挽により、明治五年（1872）から正院の官吏となり、九年には賞勲事務局三級秘書となる。また、伊藤博文の知遇を得てからは、二十一年に帝室制度取調局書記（局長は伊藤）、二十六年に内閣属秘書官室勤務（当時は第二次伊藤内閣）

となり、伊藤との関係を深めてゆく。三十一年には、第五回衆議院議員総選挙三重県第四区において立憲自由党より出馬、当選し、第三次伊藤内閣下で議員となる。議員を退いてからは伊藤の秘書となり、漢詩人・中国文学研究者として業績を残した森槐南（1863～1911）とともに、詩人としての伊藤の側近となった。伊藤の死後は、郷里の伊勢に戻り、漢詩結社の顧問となる。大正九年死去。享年七十二。

書簡の宛先の二人、日下部弁二郎は巖谷一六の次男で、幼時に日下部鳴鶴の養子となった。ただし、実父・義父のように書家としての道を歩まず、工部大学校を卒業後、土木技師となり、東京工学院院长となる。巖谷季雄は、作家・児童文学者となる巖谷小波（号は小波、一六の三男）である。一六が明治三十八年に亡くなると、その七回忌のために一六の漢詩文集『一六遺稿』が編纂された。この書簡は、四十四年四月、その校閲を行った錦山に跋文を依頼したことへの返書である。

錦山の言う「往年尊考ト文章軌範ヲ対読之節、川田甕江翁ノ評點有之候モノヲ翁ヨリ借受」とは、正確な年月は判然としないが、明治十年代前半に幕末・明治の漢学者である川田甕江（1830～1896）から、漢文の代表的な名文集『文章軌範』に甕江が優れた部分や、重要な部分を指し示したものを借り受けたのであろう。また、先に記した

ように、錦山は一六の推挽により官吏となる一方、明治十年には一六に代わって幼少の小波に漢文の素読を教えるなど、錦山・一六の交際は私的な部分にも広がっている。小波の懐古録(『我が五十年』など)からは、豪放磊落とも、粗放とも見える錦山の姿が伺え、同時に一六がそのような人物像を愛した姿が伺える。錦山の『一六遺稿』跋文(原漢文)の一節には、「公(一六)は休暇には私を自宅に招き、酒を交えて芸術について話をし、一日として無駄に過ごされることはなかった。先生の心の中は清らかであり、穏やかであった。ご自分の給料で購入された中国の書籍や、書の拓本を私の気の済むまで見せてくださり、自然と影響を受けたことは少なくなかった」とある。書家・漢詩人としての錦山は、一六によって大きく成長したのである。書簡と跋文にある「師父之恩(先生の深い愛情)」という言葉は、一六に対する感謝の思いをこめたものである。

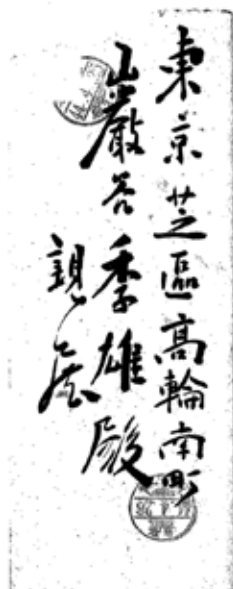
錦山の漢詩文は、一六と同じように錦山の七回忌に合わせて、大正十五年(1926)冬に『錦山遺稿』上下巻二冊として刊行された。この本は、日本での印刷ではなく、当時上海に設立されていた中華書局において、聚珍倣宋版(宋朝体の活字版。

聚珍版は活字版の美称)を用いて刊行されている。更に題簽は書家の唐駝が書き、中表紙は同じく書家の兪復が書くという、かなり凝った作りとなっている。但し、架蔵本に「南清動乱(昭和二年三月に起きた、国民党軍の南京制圧に伴う混乱)のため、贈るのが遅れた」との書状(原漢文)があり、実際には翌年の昭和二年六月に参列者などへの贈呈があったようである。

構成は、上巻が漢文(文体毎の配列)、下巻が漢詩(成立年順)となっている。漢詩は明治十三年から大正七年の作品を収めるが、全てではなく、錦山あるいは別人が選び出したものである。特に錦山が漢詩壇に初めて登場した記念作である『東京才人絶句』(明治八年刊)所収の漢詩も収めないなど、若書きのものは意識して採録を避けたと考えられる。また、詩題から見ると、明治二十一年ごろまでは一六が登場するが、二十二年からは森槐南、伊

藤春畝(春畝は伊藤博文の号)がよく現れ、錦山の交際の移り変わりを知ることができる。

今回は書簡と『錦山遺稿』の紹介を中心としたが、今後も他の漢詩文集なども含めて、明治から大正の漢詩人たちの姿を描き出したいと考えている。



矢土錦山書簡、封筒表面。裏面綴じ目には錦山の号の一つ「澹園」の印と、下部には「伊勢飯南郡/射和村/矢土勝之」の住所印が鈐印している。

—アジア太平洋研究センター (CAPS) 資料室をご利用下さい—

利用方法については電話やEメールでお問い合わせ下さい。センターHPでも確認できます。

【利用時間】 ■月～金曜日 9時30分から 16時30分 / ■土曜日 9時30分から 11時30分

## アジア太平洋研究センター (CAPS) 活動報告 (2015.6.16 ~ 2015.9.15)

## 研究出張、公開講演会などの記録

## ・センタープロジェクト海外出張

- ◇7月24日(金) (9月13日まで)  
出張者: 文学部教授 石 剛  
調査地: 中国  
目的: 研究現地調査及び、海外在住の研究協力者との打ち合わせ
- ◇8月8日(土) (8月31日まで)  
出張者: 法学部准教授 李 林静  
調査地: 中国  
目的: 中国内蒙古自治区にて第3回国際ツングース言語・学会に参加し、ホジェン語の動詞屈折辞について報告を行うため。
- ◇8月20日(木) (8月26日まで)  
出張者: 文学部教授 小林 盾  
調査地: アメリカ  
目的: アメリカ社会学会にて、合理性と社会部会理事会に理事として出席し、研究成果「Mobile Social Dilemmas in an Experiment」を報告するため
- ◇8月24日(月) (8月28日まで)  
出張者: 法学部教授 湯山 トミ子  
調査地: 中国  
目的: パイロットプロジェクト研究遂行のための資料収集
- ◇8月26日(水) (9月11日まで)  
出張者: アジア太平洋研究センター 主任研究員 田浪 亜央江  
調査地: イスラエル  
目的: 出張者の研究に関する資料収集、研究関連機関訪問

## ・センタープロジェクト国内出張

- ◇7月3日(金) (7月5日まで)  
出張者: アジア太平洋研究センター 特別研究員 長谷川 明香  
調査地: 北海道  
目的: 認知言語学フォーラム 2015 に参加し発表するため。および、その前後に主催者、発表者と研究の打ち合わせをするため
- ◇7月17日(金) (7月19日まで)  
出張者: 文学部教授 小林 盾  
調査地: 北海道  
目的: NPO法人全国結婚支援センターの活動に同行し、結婚支援活動のフィールド調査を実施するため
- ◇8月28日(金) (8月30日まで)  
出張者: アジア太平洋研究センター 特別研究員 大崎 裕子  
調査地: 大阪

- 目的: 第60回数理社会学会大会に参加するため
- ◇9月11日(金) (9月13日まで)  
出張者: 文学部教授 森 雄一  
調査地: 京都  
目的: 日本認知言語学会出席のため
- ◇9月11日(金) (9月13日まで)  
出張者: アジア太平洋研究センター特別研究員 長谷川 明香  
調査地: 京都  
目的: 日本認知言語学会出席のため

## ・公開講演会/ワークショップ

- ◇7月10日(金) 『共生とアイデンティティの思想』講演会  
講演者: 花崎 皋平氏  
参加者: 140名
- ◇7月11日(土) 『共生をめぐって-活動と反省-』ワークショップ  
パネラー: 花崎 皋平・弓野 恵子・孫 和代  
司 会: 鶴飼 哲 (一橋大学教授)  
参加者: 31名
- ◇7月12日(日) 『浪曲からパンソリへ、パンソリから浪曲へ』ワークショップ  
パネラー: 玉川 奈々福、安 聖民、澤村 豊子、趙 倫子、姜 信子  
参加者: 32名
- ◇8月8日(日) 『シベリア抑留を考える』ワークショップ  
パネラー: アンドレアス・ヒルガー・富田 武・山本 顕一・渡辺 祥子  
司 会: 麻田 雅文  
参加者: 52名

## 2015年度運営委員会・所員会議開催の記録

- |          |          |
|----------|----------|
| 6月19日(金) | 第2回所員会議  |
| 6月26日(金) | 第2回運営委員会 |
| 7月17日(金) | 第3回所員会議  |
| 7月24日(金) | 第3回運営委員会 |

## CAPS Newsletter No.128

2015年10月15日発行

編集発行: 成蹊大学アジア太平洋研究センター  
〒180-8633 武蔵野市吉祥寺北町3-3-1

☎ 0422-37-3549 (ダイヤルイン)

FAX 0422-37-3866

E-mail: caps@jim.seikei.ac.jp

Web: <http://www.seikei.ac.jp/university/caps/>